

---

# フラワー

夏目洋介

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

フラー

### 【ZPDF】

N9222D

### 【作者名】

夏田洋介

### 【あらすじ】

恋の悩みは人それぞれ。誰しも悩みながら恋をしていくといつお話し・・・かな?

「はい、こちら立花悩み相談所。・・・えつ、彼女が別れてくれない？そりやあ大変だ。」

俺の名前は立花幸雄。東京の街で悩み相談所を経営している。こう見えて社長だ。

・・・と言つても社員は秘書の中西君だけの小さな会社だけね。こここの会社の仕事内容は、ずばり！・・・世に溢れる民衆の悩みの相談にのり、解決に導くことだ。といつてもその相談内容はほぼ九割近くが男女関係のトラブル。東京という大都市でこれだけ人がいたらやはりトラブルは耐えないので。

悩みが耐えないこともあって会社の経営状態は上々。さらに俺自身の天才的なアドバイスのおかげでその評判もうなぎのぼりときたもんだ。何でそんなにアドバイスが上手いかつて？それはもちろん、俺自身の経験からだ。過去に何十人と女性と付き合つてきた俺の経験が的確なアドバイスを生み出しているのだ。当時はそんなこと考えもしなかつたがな（笑）

数ある男女の相談内容の中には、「憧れの先輩と付き合いたい」といつたかわいいものから「バーのママを口説きたい」といった艶めかしいものまで様々だが、その中でも一番多く、俺の得意分野としているものが、『別れ話』。

やはり人と人とのつながりは、つながることは簡単だが、断ち切ることは難しい。どうにもならないその悩みを俺に相談する、というわけだ。

「社長、今日は一時から依頼との面会があります。」

秘書の中西君がそう言ってコーヒーを淹ってくれた。俺はコーヒーには砂糖が小さじ4杯入っていないと納得しない。極度な甘党だ。彼女はそれを確実に行つたものを毎回提供してくれる、完璧に。素晴らしい。

・・・彼女、中西君は俺が仕事を始めた一年前から秘書をやつてもらつている。以前は普通の会社の社長秘書をやつていたらしいが、俺がネットで募集したところうちに就職してくれた。なんでその会社を辞めたかって？そんなことはどうでもいい。誰にだつて話したくない過去の一つや一つあるだろう？彼女にだつて俺にだつてな。ただ彼女には秘書としての経験があり、何よりも色んな修羅場をくぐり抜けてきただろうその表情に惹かれた。それが採用の理由だ。

「社長」

「ああ、すまない。で、どんな用件だっけ？」

「先日社長が電話で話してらした、五年付き合つた彼女と別れ話を持ち出したところ、泣き始めて取り付く島もないとのことです。さらには包丁も持ち出し別れるなら死ぬ・・・と。その時は何とか別れ話を撤回して取り繕つたらしいですが。どうなさいますか？」

中西君は表情一つ変えずにせらつと修羅場を語つてみせた。相変わらずのクールだ。素晴らしい。

「そつか。そりや難儀だな。とりあえず、依頼人と話をしよう。」

俺はそう言って事務所の一階にある喫茶店で依頼人と話すことにした。

午後二時。時間ピッタリに依頼人はやってきた。軽く挨拶を交わし、さつそく相談を聞いてみる。が、だいたいは電話で話していたのと同じ内容でどうやら新しい女が出来たから別れたいというのが本音らしい。「うむ、分かりやすくて結構。

「分かりました。では今後の対応に関係する質問をさせていただきます。あなたは彼女を愛していましたか？本音でお願いします。」

依頼人は少し悩み、こり答えた。

「うん・・・もともと彼女からの告白で何となく付き合い始めてずるずると言つた感じで、確かに楽しくはあつたけど、愛してるかと聞かれたらそうでもないかな。」

分かりにくい言葉で依頼人は言つて見せた。オーケイ。じゃあ、あらの方法だな・・・。

「結構です。ではこれから別れ方をアドバイスして差し上げます。見事成功した際には依頼金のほう、お忘れなく・・・では・・・」

俺はそう言つて別れ方を伝えた。依頼人は俺の話に聞き入り、ありがとうござりますと言つて店を出て行つた。

数日後、依頼人から電話が届いた。

（あつ、先日はありがとうございました！おかげで見事彼女と別れることが出来ました！もう見事言つてたとおりでしたよ。依頼金は

口座の方に振り込ませてもらいますので。」

そう言つて依頼人は電話を切つた。女なんてちょろいもんだ。俺はそう思つて受話器を置いた。

「社長、今度はどうやつて別れさせたんです？」

中西君が花瓶の花を変えながらそう言つて俺に聞いてきた。

「ん？ 気になるかい？ 今回はな、依頼人の方に彼女に対する愛が過去にも現在にも全くないということを利用させてもらつたのさ。依頼人にはあれから彼女にさんざん暴力を振るつてもらつた。小さく気になることから全く気にしないことまで、何にでも文句を言い、その度に殴るように言い聞かせた。それも「愛してる」と言いながらな。「お前のためにこんなことしてるんだ」、「殴つてやつてるんだ、喜べ」といった具合にね。人は不思議なもんで、逃げるものには追いたくなり、追つてくるものからは逃げたくなる。さらに暴力というスペースを加えたものからはさらに逃げたくなるだろう。そこをうまくついたのさ。しかし、元々は恋人同士。これが罪の意識になつてしまつたらまずい。そこでこれを実行する前に聞いたのさ。「彼女を愛していたかつてね」。彼の答えは「ノー」。つまり、どんなに非常な行動をとつても依頼人は気にしないということさ。ちなみに昔俺もこれをしたことがある。効き目は実験済みというわけだ。」

俺は得意げに語つて見せた。中西君は少し口元を動かしたが、いつものクールな表情で、素晴らしいです。そう言つていつものコーヒーを淹れてくれた。砂糖を小さじ四杯入れてくれたコーヒーを・・・。

目が覚めると俺は事務所のソファで横になっていた。そのまま寝てしまったのか。今日はあのあと事務仕事が溜まっており少し仮眠を取つたつもりが夜中になってしまったみたいだ。すぐ横の時計を見ると深夜一時。ふと机を見るとメモが置いてあった。『起こしても起きられなかつたのでお先に失礼します。中西』ふと自分を見ると毛布が掛けられていた。風邪をひかない様に気を回してくれたんだな。さすが中西君。

ふいに自分の過去のことを思い出した。思えば色んな人と付き合つてきたけど、どいつもこいつも俺を本気にさせてくれるヤツなんかいなかつたな・・・だが、もうそろそろ身を固めてもいいかもな。そう中西君のような素晴らしい女性と・・・

そこで急に電話が鳴り、立花の意識が現実に戻された。何だよ、こんな時間に。そう思いながら立花は電話を取つた。

「はい、こちら立花悩み相談所。」

（・・・あの・・・）ちらで男女の悩みを解決してくれると聞いたのですが・・・

蚊が飛ぶよつなか細い女の声が耳元から聞こえてきた。

「やうですけど、どんな用件でしょ?」

（私の彼氏が暴力がひどいんです。以前はそんなことなかつたのに・・・）

彼女は泣いているみたいだ。俺は女の涙には弱い。何とか救つてやらねば……

「わうですか。具体的にどうすれば解決するためです。頑張って話してください。」

（・・・詳しく述べと、彼は私を殴りながら「お前のためにこんなことしているんだ」「殴ってやつてるんだ、喜べ」と言った感じで。・・・）

・・・ちゅつと待て、それって・・・。

彼女はさりげなく話し続けた。

（幸雄、止めてと言つても幸雄は嫌なら別れるか？と聞かなくて・・・何度も殴るんです。私は幸雄を愛しているのに・・・愛しているのにいいい）

幸雄は言葉が出なかつた。何だよこれ！電話を放り投げ床に転げ落ちた。電話からは彼女の声が途切れずに聞こえる。恐怖に怯えた幸雄は這い蹻りながらドアに向かつた。すると、今度はドアの向こうから

やめて幸雄おおお。愛しているのにいいい――！

幸雄はドアからも離れソファに頭を抱えて叫んだ。

「もうやめてくれえええ～！――亜矢！――亜矢だろ？俺が悪かつた！――許してくれ――！」

そこでドアが開いた。幸雄は恐怖のあまりそちらを見ることが出来なかつた。幸雄の肩にそつと手が置かれた。幸雄はひとつ声を上げてひっくり返つた。ふと見るとそこには・・・秘書の中西が立つていた。

「な、中西君。なんで？君が」

幸雄は声が詰まりながらわけが分からぬといつた顔をした。

「まだわからないの？私、亜矢だよ。」

中西はそう言って微笑んで見せた。そこにはいつもの中西のクールな表情はなかつた。

「あなた、毎日コーヒー飲んでわからなかつたの？」

幸雄ははつとなつた。確かにコーヒーの砂糖の数を中西に指示した記憶がない。

「だつてその顔は？」

亜矢はふつと笑い、

「整形よ。あなたに殴られて私の顔は醜くなつてしまつた。元の顔に戻すことも可能だつたけど、どうせならあなたに仕返ししてやうと思つてね。」

亜矢はそこで笑顔がなくなり、

「私の人生を目茶苦茶にしたあなたにね！！」

亜矢はポケットから包丁を取り出し、幸雄に向けた。月の光に照らし出された包丁は亜矢の顔に反射して不気味に照らし出した。その顔には凶器が満ちていた。幸雄は頭を抱え、「ごめんなさい、ごめんなさい」を連発した。お尻を亜矢にむけ、その姿はまるで母親に怒られた小さい子供のようであった。

亜矢はそれを見て、ふと力なく笑い、

「なんか・・・バカみたい・・・こんな人のために整形までして・・・ああ、もう復讐なんてバカらしくなっちゃつた。こんな人のために罪まで背負うのもバカらしいよ。」

亜矢はそう言つて包丁を下に向けた。それを見て幸雄はふと一息ついた。

「けど・・・あなたを許しなんかはしない。一生私のために側にいなさい。それがあなたを殺さない唯一の条件よ。」

亜矢はそう言つて幸雄の首筋に包丁を向けた。一度は安心した幸雄は驚いて、「はいいい！！」と変な返事をしてしまった。亜矢はそれを聞いてさらに幸雄の変な顔を見てハハハッと笑つた。そこにはいつものクールな中西も先ほどの復讐者の面影もなかつた・・・。

俺の名前は立花幸雄。東京の街で悩み相談所を経営している。こう見えて社長だ・・・った。

「こちら立花悩み相談所。・・・えつ、彼女が別れてくれない? 簡單に別れるな! バカ!」

事務所には亜矢の通る声が響いた。

「ほらつ 幸雄、紅茶淹れて。砂糖は・・・分かつてゐるわね。言われ  
なくてもそれくらいやつてよ。」

亜矢に怒鳴られ「はい」と変な声を出して幸雄は走った。  
現在では立場が逆転し、亜矢が悩み相談に答えるようになつていて。幸雄の方針とは全く異なり男女の別れを引き止めることがばかりしている。これがなぜか人気がある。亜矢曰く、

「人に相談するようなやつは心のどこかで引き止めてもらいたいんだよ。」

俺には全く分からぬが人気があるだけに文句も言えない。過去のこともあり、亜矢には頭が上がらず、めつきり秘書の立場に落ちてしまつた。だが・・・あの一見以来、自分が色々な女性に今までにしてきた罪の重さ、深さに悔いいるようになり、逆にそれを含め側にいてくれる亜矢には感謝をしている。俺の罪は決して消えないだろう。だが・・・少しずつ、少しずつ返していく。ごめんな、亜矢。

「はい、こちら立花悩み相談所！えつ、別れたい？だから別れんなあ！！！！！」

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9222d/>

---

フラワー

2010年10月12日05時29分発行